

## 揺るがされない生き方

詩篇 15 篇 1-5 節

### はじめに

毎月第四週の説教は、旧約聖書の「詩篇」からお話することになっています。今日は、詩篇 15 篇から学びたいと思います。この詩は、「**ダビデの賛歌**」とあります。

### 1. 主よ、だれが

ダビデは 1 節で、「**主よ、だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか**」と神様に問いかけています。「幕屋に宿る」のはどういう人か、また「聖なる山に住む人」は、どういう人かということです。「幕屋」というのは、出エジプトの時代以降のイスラエルの民の礼拝の場です。また「聖なる山」というのは、エルサレムのことです。ソロモンの時代にそこに「神殿」が建てられました。「神殿」もまた礼拝の場です。ですから、「幕屋」も「聖なる山」も礼拝の場ということになります。

つまり詩篇 15 篇は、だれが礼拝の場にふさわしいのか、神様を礼拝するのにふさわしい人とは、どのような人かということを書いてある詩篇と言えます。1 節で、誰が礼拝の場にふさわしいのかを問い、2-5 節で、こういう人が礼拝の場にふさわしいと答えていくという構成になっています。

### 2. 誠実、正義、真実な人

2 節には、こうあります。「**全き者として歩み、義を行い、心の中の真実を語る人**」。2 節には、礼拝の場にふさわしいのはこういう人だということが、大まかに歌われています。一つは、「全き者として歩む人」、二つ目は「義を行う人」、三つ目は「心の中の真実を語る人」です。

「全き者」とは、動物の犠牲の時に用いられる言葉でもあり、「傷のない者」「汚れのない者」という意味です。ある個所では、「誠実」とも訳されます。つまり「全き者」とは、誠実に神様に従い、自分を清く保つ人という意味です。

「義を行う人」とは、正義を行う人ですが、「義」というのは、神様の前における「正しさ」を意味します。ですから、「義を行う人」とは、神様の前で正しく歩む人、具体的には律法を守り行う人という意味です。

「心の中の真実を語る人」とは、嘘偽りのない人のことです。良心に偽りなく、真っ直ぐに真実を語る人のことです。

神様を礼拝するのにふさわしい人というのは、「誠実」「正義」「真実」という三つの言葉で言い表されるような人です。

### 3. 口を制し、確かな眼差し、憐れみの心を持つ

しかし、「誠実」「正義」「真実」というのは、どこか抽象的です。この「誠実に歩む人」「正義を行う人」「真実を語る人」というのは、具体的にどういう人なのか、というのが3-5節に書かれています。

3節には、こうあります。「**舌をもって中傷せず、友人に悪を行わず、隣人へのそしりを口にしない人**」。「誠実に歩む人」「正義を行う人」「真実を語る人」というのは、「舌をもって中傷せず、友人に悪を行わず、隣人のそしりを口にしない人」のことです。

ここで特徴的なことの一つは、「舌」や「口」という言葉に関することであるということです。もう一つは「友人」や「隣人」という親しい人に関することであるということです。「中傷する」という言葉は、もともと「足」という意味の言葉ですから、人の悪口を言いふらすこと、歩き回って多くの人に友人や隣人の悪口を言うことを意味します。「そしり」という言葉は、「非難する」という意味です。このように、親しい友人や隣人の悪口や非難を口にし、多くの人に言い広めること、それが「言葉」による「悪」なのです。こういうことをする人は、神様を礼拝するのにふさわしくない人です。こういうことをしない人こそ、礼拝の場にふさわしいのです。

4節を見てみましょう。「**その目は、主に捨てられた者を蔑み、主を恐れる者を、彼は尊ぶ**」。「誠実に歩む人」「正義を行う人」「真実を語る人」というのは、「主に捨てられた者を蔑み、主を恐れる者を尊ぶ」人です。「主に捨てられた者」というのは、主を捨てた人です。神様を否定し、神様に逆らう人です。「主を恐れる人」というのは、神様を怖がる人というより、ユダヤ人特有の「神様を信じる人」「神様に従う人」「神様を愛する人」という表現です。

ここでは、要するに、神様と同じ眼差しで人を見る人のことが言われているのです。神様が憎む人を憎み、神様が愛する人を愛するということです。ですから、神様を礼拝するのにふさわしい人というのは、神様が憎む人を愛したり、神様が愛する人を憎んだりすることなく、神様が憎む人を憎み、神様が愛する人を愛していく人なのです。こういう人こそ、礼拝の場にふさわしいのです。

4節後半から5節を見てみましょう。「**損になっても、誓ったことは変えない。利息をつけて金を貸すことはせず、潔白な人を不利にする賄賂を受け取らない**」。「誠実に歩む人」「正義を行う人」「真実を語る人」というのは、「損になっても、誓ったことを変えない」人、「利息をつけて金を貸さない」人、「潔白な人を不利にする賄賂を受け取らない」人です。

「損になっても、誓ったことを変えない」というのは、神様に誓ったことは必ず守る、あるいは人に約束したことは、必ず守るということです。一度した約束は、途中でどんな状況になろうとも、たとえ自分に不利な状況になっても、必ず守るということです。

また「利息をつけて金を貸すことはしない」というのは、利息をつけること全般が禁じられているわけではありません。イスラエルの民は、貧しい人に利息を付けること、同じイスラエルの民の同胞に利息を付けることが禁じられていました。ここで禁じられているのは、

高い利息で、貧しい人たちを苦しめることです。貧しい人たちを食い物にする金持ちの高利貸しを戒めているのです。貧しい人の生活を支え、喜んで無利子でお金を貸すことが求められているのです。

また「潔白な人を不利にする賄賂を受け取らない」というのは、裁判の席でお金をもらって、嘘の証言をすることです。お金によって真実を歪めてしまうことです。

ここでの特徴は、自分の利益を第一に求めないということです。一度約束したことは、たとえ自分にとって不利な状況になっても守るのです。自分の利益を求めて、人に金を貸すのではなく、貧しい人を助けたいという思いで金を貸すのです。また金に左右されず、無実の人を守る真実な証言をすることです。こういう人こそ、神様を礼拝するのにふさわしい人であり、礼拝の場にふさわしい人なのです。

#### 4. 隣人への愛と神への愛

このように、神様を礼拝するのにふさわしい人、礼拝の場にふさわしい人というのは、「誠実に歩む人」「正義を行う人」「真実を語る人」です。それは、具体的には、人の悪口や非難を言い広めた事しない人であり、神様の眼差しで人を見る人であり、自分の利益を求めないで、人を助け支える人でした。詩篇 15 篇は、神様を礼拝するのにふさわしい人、礼拝の場にふさわしい人とは、一言で言えば、隣人を愛する人だと歌っているのです。隣人に対して、「誠実に歩み」「正義を行い」「真実を語る」人です。また言葉で隣人を傷つけず、自分の利益よりも人の利益を優先する人です。このように、隣人を愛する人こそ、神様を礼拝するのにふさわしい人であり、礼拝の場にふさわしい人なのだと、詩篇 15 篇は歌っているのです。なぜ神様を礼拝するのにふさわしい人が、隣人を愛する人なのでしょう。神様を礼拝するのにふさわしい人は、神様に対する愛が深い人のほうが良いのではないのでしょうか。良く祈る人とか、よく聖書を読む人とか、よく賛美をする人とか、礼拝を休まない人とか。しかし詩篇 15 篇は、礼拝におけるふさわしさは、隣人愛によって計られるということです。

I ヨハネ 4：20-21 には、こうあります。「**神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は兄弟も愛すべきです。私たちはこの命令を神から受けています**」。この御言葉によれば、目に見える隣人を愛している人こそ、目に見えない神様を愛することができるということです。神様を愛していると言いながら、隣人を愛していないなら、その人は、本当は神様を愛していないのだということです。神様への愛は、隣人への愛によって計られるのです。その意味で、神様を礼拝するのにふさわしい人というのは、隣人を愛する人なのです。

イエス様も、マタイ 25：40 でこう言われました。「**まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです**」。私たちのイエス様への愛は、隣人への愛を通して、特に最も小さい者たちの一人にしたことを通して計られるのです。

私たちは、日曜日の礼拝に集まり、そこから週の六日間、それぞれの場で過ごします。そ

の六日間で、私たちは様々な隣人と接します。その六日間で、私たちが隣人に対してどのように接したのかが、礼拝におけるふさわしさとなっていくのです。その六日間で、私たちは「誠実に歩んだか」「正義を行なったか」「真実を語ったか」というのが、礼拝の場で問われるのです。ですから私たちは、礼拝の中で、「罪の告白」の時を持つのです。その祈りの中で、自分が隣人に対してどうであったのかを探り、告白するのです。

その意味で、日曜日の礼拝と週の六日間は、密接に結び付いているのです。礼拝への備えは、月曜日から始まるのです。月曜日から土曜日まで、私たちは隣人に対してどのように接してきたのかが備えとなるのです。

しかし私たちは、隣人を十分に愛することの難しさを覚えます。私たちの生まれながらの性質である自己中心が顔を出し、人の利益よりも自分の利益のことを優先にしていまいます。特に怒ったり、声を荒げてしまったりします。人に冷たい態度を取ったりしてしまいます。そういう意味では、自分は神様を礼拝するのにふさわしいと言える人は、ほとんどいないのではないのでしょうか。

しかしそれでも、私たちが神様を礼拝するのはなぜでしょうか。それは、イエス様の十字架の贖いがあるからです。ヘブル 10：10には、こうあります。「**このみこころにしたがって、イエス・キリストのからだを、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています**」。またヘブル 10：19-20には、こうもあります。「**こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました**」。

私たちは、隣人を十分に愛することができないかもしれません。それでも、イエス様がご自分のからだを十字架で献げてくださったことにより、イエス様を信じる私たちは、聖なるものとされ、大胆に礼拝に参加することができるのです。そして、その礼拝を通して、私たちは教えられ、励まされ、慰められ、力づけられ、変えられていくのです。そうして私たちはまた、隣人のもとへ遣わされていくのです。

## **おわりに**

5 節の最後に、「**このように行う人は、決して揺るがされない**」とあります。つまり、隣人を愛し、神様を礼拝する人は、「決して揺るがされない」ということです。たとえ大きな苦難や試練に見舞われる時でも、そういう人は決して揺るがされないというのです。私たちは、胸を張って、自分こそ神様を礼拝するのにふさわしいとは言えないかもしれません。しかし私たちに、イエス様がいます。イエス様が私たちに礼拝に招いてくださるのです。

礼拝は、神の国が最も豊かに現れる場です。神様が支配される場です。その意味で、礼拝は天国の前味を味わえる場と言われます。天国は、私たちの礼拝よりも遥かに豊かなものでしょう。しかし私たちの礼拝は、その一部を味わう場なのです。礼拝において、安らぎと安息を得るのです。イエス様は言われました。「**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます**」(マタイ 11：28)。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、私たちの礼拝を求めておられます。しかし私たちは、隣人への愛に乏しい者です。その意味で、あなたへの愛も乏しい者です。しかしあなたが遣わされたイエス様は、「わたしのもとに来なさい」と礼拝に招いてくださいます。どうか、愛に乏しい私たちですが、イエス様の十字架を通して、あなたを礼拝させてください。礼拝を通して、私たちを教え、励まし、慰め、カづけ、変えてください。そして週ごとに、天国の前味を味わわせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。